

中国古代史研究の問題点―甲骨学と金文学を中心に―

杉 本 憲 司

中国古代の研究における画期的な出来事は、従来の古典籍による経史の学の上に、新しく地下から発見された文字資料と考古資料による新しい研究によってひきおこされたことは皆よく知るところである。古くは晋代に汲郡で発見された(二七九年)戦国時代の魏国の竹簡に書かれた年代記の『竹書紀年』などが、今日の出土文字資料とおなじものとしてしられる。また宋代に生まれた金石学にみられる青銅器とそこに刻まれた文字(金文)にたいする興味から始まる古代についての探求は、今日の甲骨文字や、青銅器の銘文(金文)による研究につながってくる。このことによって史書、経書だけからの研究による歴史が、真の歴史の解明に近づくことができるようになった。

一、甲骨学について

一八九九年、今日の河南省安陽郊外で発見された竜骨といわれる亀甲獣骨が、漢方の薬として北京の薬屋で販

売されていたものを、古文字に関心を持っていた劉鶚(字 鉄雲)が、仕えていた主人の国子監祭酒である王懿榮のところまでみて、そこに文字らしきものが刻され、それが今までに知られる古文字より古いように思われるところから、二人は文字学や金石学の知識を基礎に検討した結果、今までしられなかった古い文字であるとし、この竜骨といわれるものを集め検討をはじめた。その後も亀甲獣骨の蒐集を継続し5000余件を集め一九〇三年に文字の多くある1058件の拓本を石版印刷し出版した。これがはじめて世界に甲骨文字の存在を明らかにした『鉄雲蔵龜』(6冊)で、これをいち早く日本の学界に紹介をしたのが林泰輔であった(『亀甲獣骨文字』一九一七年)。辛亥革命(一九一一年)を避けて京都にきた羅振玉・王国維は、わが国に殷関係だけでなく中国古代史の多くの面で影響を与えた。甲骨文字についていえば、羅振玉は『殷虚書契前編』などいくつかの拓本資料集と文字解説のための『殷虚書契考釈』などを出版している。羅氏の弟子である王国維は師のすすめもあつて新出の史料である古文字・古器物の学と旧史料である経史の学と相表裏する古代史研究を行い、後に彼の著作集である『觀堂集林』『觀堂別集補遺』に収められた多くの論文がその成果である。

王国維が中国に帰国した(一九一六年)のち、上海のイギリス系の倉聖明知大学をえて、師の羅振玉が帰国した北京にうつり、師とともに紫禁城の書籍、古銅器の調査をおこない、その後、清華学院の教授になったが「主辱められれば臣死すの義」に従い昆明池に入水自殺した(一九二七年)。ここに二〇世紀初頭を代表する中国の史学者の一人が姿を消したが、彼がのこした業績はこれ以後の中国古代史研究の基本となり、とくに「竜骨」上の文字の研究、即ち「甲骨学」の研究はここに始まったといえる。

甲骨学の新しい発展は、一九二八年に設立された中華民国政府の最高學術機関、中央研究院の歴史語言研究所が、その年の秋から文字が刻せられた甲骨が出土していた河南省安陽県(現 市)小屯の殷都と考えられる殷虚遺

跡の科学的發掘が始めた。これを指揮したのが王国維をつぐ殷代史研究の第一人である董作賓である。ここに初めて学者の手による甲骨文の地下からのとりあげがおこなわれることになり、「甲骨学」研究の第二期が始まる。早速「新獲卜辞写本」として『安陽發掘報告』第1期に發表された（一九二九年）。第3回の發掘（一九二九年秋）までは試験的なものであったが、甲骨4636片をはじめ土器、石器、石製人物像、銅器などの遺物、墓葬坑などの遺構を發見した。そのなかで最も重要なのは完全な4枚の亀甲で、そのうえには多数の卜辞が刻せられていた。これについては董作賓が「大亀四版考釈」として發表した。しかし、發掘そのものは、地元の河南省政府と中央研究院・北京の民国政府のあいだに意見の相違があり、次の年（一九三〇年）の殷虚の調査ができなくなる。このため一九三〇年には歴史語言研究所は山東省古蹟研究会と協力して山東省歴城県（現 章丘市）城子崖竜山鎮遺跡の新石器文化の遺跡、ここでは、従来よく知られた彩色土器（彩陶）と異なる黒色の光沢のある土器（黒陶）が出土し、それが古銅器に器形が似ているところから調査をはじめ、ここにいわゆる竜山文化を發見し、さらに版築された城壁を發掘した。これが殷虚遺跡での地層を度重なる氾濫によるものと理解していたものが、版築によってつき固められた建築にかかわる基壇の遺構ではないかとする成果をもたらした。

一九三一年の第四次發掘調査以後、一九三七年春の第一次發掘調査終了後、日中戦争で中断されるまで、殷虚遺跡での調査範囲は拡大し、後岡での考古年代の上から殷代、黒陶、彩陶の文化層の發見、大墓の調査、侯家莊での大墓群の調査、小屯での建築群の調査などが多くの困難のなかで行われ多くの成果をあげている。日中戦争では調査が中断したばかりでなく、中央研究院は殷虚遺跡からの出土品とともに北京から南京へ南遷し、さらに四川の奥地まで移動したので、多くの遺物の中では途中でうしなわれたりするものが多くあった。戦争終了後、中央研究院はもとにもどったが、内乱、経済問題などの困難、最後には国民党政府の瓦解、台湾への脱出によって、

中央研究院も台北に移り整理・研究もおおくの困難のなかで、台湾にうつった董作賓・李濟らの研究者によって継続された。

甲骨に関しては一九四八以来『小屯・殷虛文字』甲編・乙編上中下の4冊が出版された。董作賓はこの間にも個人の研究をおこない、一九四五年には大著『殷曆譜』を出版した。これは一九三三年に発表した「甲骨文断代研究例」（『慶祝 蔡元培先生六十五歲論文集』所収）で占い師である「貞人」説をだし、あわせて1、出土の坑層。2、ともに出土した遺物。3、占いの（貞卜）内容。4、祀る帝王。5、貞人。6、文体。7、用字。8、書法。などの8項目をもとにした甲骨の断代研究は、甲骨文を殷代史研究の史料として使えることを導いた。これによると甲骨文は

第一期Ⅱ武丁及びそれ以前（盤庚、小辛、小乙）

第二期Ⅱ祖庚、祖甲

第三期Ⅱ廩辛、康丁

第四期Ⅱ武乙、文丁

第五期Ⅱ帝乙、帝辛（紂王）

に分期されている。これらの董氏自身の研究をうけて戦中の混乱のなかで発表したのが前出の『殷曆譜』で、殷代の暦法を復原し、それをもとに日曆譜を編成するのが目的であつたが、同時に董氏は甲骨文編年にあたらしく第四期後半の文丁時代の卜辞群を設定するとともに、さらに殷の文物制度における新旧両派が存在し、それが交替してあらわれるとした。すなわち、

第一段階 旧派（古法にしたがつたもの） 盤庚・小辛・小乙・武丁・祖庚

第二段階 新派(新制に改革したもの) 祖甲・廩辛・庚丁

第三段階 旧派(古法を回復したもの) 武乙・武丁(文武丁)

第四段階 新派(新制を回復したもの) 帝乙・帝辛

である。この新旧両派の差異はまず祭祀においてあらわれ。先王・先妣(皇后)にたいする祭祀は、その干名の日におこなわれる。ところが旧派では先王・先妣を祭るのに必ずしも先後順序のさだめがなかった。このほか董氏は五種の祀典である五祀についての祀序にも説をたてている。しかしながら、これらの説には「文武丁卜辞の謎」が充分に反映されていなかった。

これについていち早く論じたのは日本の貝塚茂樹・伊藤道治で、「甲骨文断代研究法の再検討」(『東方学報』第二三冊 一九五三年)で、第三段階文丁時代とした甲骨グループは、内容的にみてもかならずしも董氏のいうように、旧派といってよいようなものではなく、むしろ従来、武乙・文丁を一括して第四段階といわれていた甲骨文に旧派的要素が非常に多いことをのべた。また五期にわたる王朝卜辞や王族・多子族の卜辞以外に、第四期の甲骨分と同出する別の甲骨の一群があり、この一群のうち、早いものは第二期に及び、第三期を中心として、第四期に及ぶものをふくみ、内容的には旧派に属するとした。

また日中交流がまだ充分でなかったので、董氏の研究情報がとざされたなかで、わが国の島邦男が『甲骨卜辞研究』(一九五八年)で五祀の祀序をみつけだしている。

中国では陳夢家が『殷虚卜辞綜述』(一九五六年)で断代をおこなっていて、貝塚らの言う第四期の甲骨文とともにでる別の一群のグループを第三期後半の康丁時代の甲骨文とし、従来第三期とされていた甲骨文を、前半の廩辛時代に限定しようとしている。しかし伊藤は第三期の廩辛・康丁については、たとえば廩辛という人物はじつ

さいには王位につかなかったのではないかともいわれ、とすれば、いわゆる第三期甲骨文は廩丁に属することになり、陳が康丁時代とした一群の甲骨文は、第二期から第四期にかけて、王朝卜辞とは別個に存在したものであることになるとしている。また、“文武丁卜辞”の内容は、祖先祭祀以外には、狩獵往来などに関するものが多く、卜旬卜辞といわれる甲から癸までの10日間の吉凶を卜ったものがほとんどない。ところが第四期の甲骨文には、この卜旬卜辞が多く見られる。第一期の王朝卜辞と王族卜辞・多子族卜辞が、はっきり区別されるほど、この一群の甲骨と第四期甲骨文とは異質のものであったかどうか疑問である。しかしこの一群を祭祀卜辞としてみるかぎりには、第三期としての要素が非常に強いとみている。

李学勤もこれらの卜辞に注目し、「帝乙時代的非王卜辞」（『考古学報』一九五八年第一期）でおよそ次ぎようにのべている。殷虚第一五次発掘のYH251、YH330坑から出土した、字体が同じ特殊な卜辞の内容は婦女に関することが多い非王卜辞である。これ以後、姚孝遂、鄒衡らが論じてきたが、一九七三年の安陽小屯南地での大量の甲骨発見は（中国社会科学院考古研究所『小屯南地甲骨』上、下 一九八〇、八三年）“文武丁卜辞の謎”（好墓）は、盗掘にあつていないもので、殷虚の墓葬の分期や青銅器の断代に重要な資料を提供してくれた。特に青銅器の銘文に見える“婦好”は、甲骨文第一期に関係していて、武丁の妃であり、子からは“后母辛”と称謂されていたことがわかる。これらも甲骨卜辞の断代におおくの資料を提供した。一九七〇年代に入ると、研究のために大型のプロジェクトによるそれまでの刊行資料、研究を整理して、次の研究段階への備えをはかる計画がすすめられた。その一つに収蔵者別に刊行されていた拓本集などを、時期別・内容別に分類整理したものを、中国社会科学院歴史研究所の編集で一九八七—一九九二年にかけて出版した『甲骨文合集』全13冊がみられる。この関

係書の『材料来源表』、『釈文』、『補編』などが甲骨学一百年の一九九九年に出された。これらのほか姚孝遂ら『殷虚甲骨刻辞 摹释総集』（一九八八、2冊）、李学勤ら『英国所藏甲骨集』（一九八六年）などもみられる。また甲骨文を読むための工具類としての檢索書に姚孝遂ら『殷墟甲骨刻辞類纂』（3冊 一九八九年）、字釋諸説を総合するものとしての于省吾主編『甲骨文字詁林』（4冊 一九九六年）、松丸道雄・高島謙一『甲骨文字字釋綜覧』（一九九四年）がある。一九九〇年代になっても多くの甲骨が発見されており、一九九一年九月には小屯洹南花園莊東地窖穴H2から大量の甲骨が一括出土し、刻辞のあるものが579片みられた。これらは武丁期の早期にあたるものと注目されている。また、甲骨文発見一百年記念の一九九九年に殷虚の洹河の北から小屯殷虚より一時代古く、河南鄭州の小双橋商城に続く「洹北商城」が発見され、殷代史研究に新しい局面がうまれてきた。甲骨はまだ発見されていないが今後の殷代中期の甲骨の出現が期待される。

ここで最近の甲骨文の断代についての新しい手法について触れておこう。ひとつは甲骨の考古発掘されたときから注目されている出土の層位と坑位の考古年代を利用する。最近は今までと違って年代の想定が高位な科学的手法で行われることにより甲骨の年代前後をよりよく確定できるようになった。

つぎに甲骨を考古遺物として観察していくことによる断代である。それは甲骨で占卜するとき、まず鑿という清めをおこない亀骨を聖化し、いよいよ占いを行うまえに甲の裏に鑿をうがつが、この鑿は長い楕円形をしていて、そうして中央の深くほりこんだ直線に向かつて切り込んだ形になっている。そしてその横に鑽という円形の穴がつくられ、この鑽のところを灼くと、甲が音をたてて亀裂が入る。ちょうど鑿の部分が垂直に線が切れ、鑽の部分には横線が入る。これが卜兆とよばれている。これを貞人である占い師がみて吉兆を判断することになる。今までの甲骨文研究は拓本や模本による文字解説によることがほとんどであったが、最近甲骨そのものに手を

ふれて観察することが行われおこなわれるようになってきた。カナダの中国系学者の許進雄が『卜骨上の鉗鑿形態』（一九七三年、『甲骨上鉗鑿形態的研究』 一九七九年）を発表して、「鑿鉗に関する問題の初歩的な研究の総決」を行い、第1に実例をもって各種の鑿鉗の形態を説明しそれと年代関係を述べ、第2に鑿鉗の形態からみた王族卜辞に帰属問題、貞人の時代問題、第三期と第四期の卜骨、卜辞の事類と鑿鉗形態による関係について論じている。もうひとつは放射性同位元素のC14による甲骨そのものの年代と卜事内容による断代を考える方法もみられる。

考古年代のもう一つの方法は卜辞の刻み方による断代である。松丸道雄は早くから卜辞の書体に注目し、貞人が契刻者（卜辞の刻み手）でないこと、また甲骨文の書体が契刻者の個人的ななくせであることを強調し、その観点から卜辞を書体によってグループ分けし、それにもとづく編年を行うことを主張した（『甲骨文』における「書体」とは何か）『書道研究』一九八八—一九九〇。この主張が日本でたときちょうど中国でも同じような考えの研究が、2人の研究者から発表された。ひとり黄天樹（『殷墟王卜的分类與断代』一九九一年）であり、もう一人が彭裕商（『殷墟甲骨断代』一九九四年）で、この二人の研究は同一ではないが、同じ主旨のものであり、一致するところが多くある。

以下に浅原達郎（『中国歴史研究入門』二〇〇六年）の紹介文を介して二人の説を述べておこう。彼らは契刻者が誰かと言う視点は欠くが、ほか松丸氏の主張に沿ったもので、彼らに影響をあたえたのは中国の林澧（『小屯南地發掘与殷虚甲骨断代』一九八四年）の考えである。旧来の断代は董作賓による貞人を基準として、さらに書体をふくむ諸々の手がかりを運用して卜辞を分類し編年していた。ところが新説では董氏のような総合的判断のまえに、まず書体のみによって卜辞を分類するという作業が必要だという立場に立つ。これによる断代研究によれば、必ずしも五期の分期が最良のものではないようである。書体による分類は、断代研究の基礎として重要で

あるが、それ以外の甲骨学研究も、書体による分類を念頭におきつつ行われなければならない。要するに研究の材料になる卜辞について、それが書体にもとづく分類がどの類に属するかという点に意識のない研究は不完全なものではない。それは書体による分類が資料の編年に関係するばかりか、そのほかのいろいろな性質にも関係してくるからである。卜辞のなかにみられる現象が、書体にもとづく分類のどの類にみられることかということはおろそかにできない。これからの甲骨学においては書体による分類をしつかりとみにつけておくこと必要である。しかしながらこの新説はまだ充分に受けいれられていない。そのわけの一つに両者の説の検証が第三者においてまだ行われていないし、両者による二人の説の突き合せもまだである。それでも、今後の研究には避けて通れないことで、旧来の五期区分も書体の分期とは別物であるが、これを行ってからみたほうが明快にわかつてくる。

二、金文学について

金文学は研究史のうえから見ても、甲骨文字学のようににはじまりが一八九九年からであり、若干の例外をのぞいて時代は殷代後期の資料であり、発見地がほとんど河南の殷墟からであり、その内容はほとんどが王事に関する占いに關する記録、即ち卜辞であるというようにかざられたものでなく、金文学は広がりをもっている。注目されはじめたのは宋代にまでさかのぼるし、資料も殷代から秦漢時代まで存在するし、作者の階層もかなりの幅があり、出土地も広範囲におよび、地域差を考えなければいけないし、金文の内容も多方面におよぶ。これらのことから金文を資料としての使用することは単純な方法論では対処できない。甲骨文のように書体による分類などは金文については無効であることくらいはいうまでもない。ここで金文とはいかなるもので、その歴史資料

としての重要性についてすこしみておこう(以下 松井嘉徳「鳴り響く文字―青銅礼器の銘文と声」『漢字の中国文
化』二〇〇九年 所収を参照)。

金文とは青銅器に鑄込まれた(若干刻まれたものがある)文字で銘文ともいわれているもので、古典(『礼記』祭統篇)によれば先祖の美德・功勞・業績・受賞・名譽を称揚し、それを後世の子孫につたえるもので、そこにはこの礼器を作った作者の名が書き加えられ、先祖を慕い、先祖に従っていこうとする作者の孝道を子孫へ伝えられるものと述べられている。また、『春秋左氏伝』襄公一九年の条には、魯が齊からの戦利品である武器を鑄潰して鐘をつくり、そこに魯の武功を書きしるしたことについて、これを非礼とした魯の臧武仲の言葉がみられ、それによれば銘文とは天子が徳を記しても功は記さず、諸侯は時節に合した功勞を記し、大夫は武功を記すものであるとしている。即ち銘文に書きしるされる事柄は身分によって区別されているが、銘文とは自らの功徳を書きしるして、子孫に示すためのものであると考えられていたことが分かる。つぎに実物の青銅礼器についてみよう。

考古学的には青銅礼器が見られるのは二里頭文化期で、最近では文献史料にみえる夏王朝にあたる時期としている。しかしこのときは小さい鈴で、酒器の容器である爵・觚・罍がみられるが、鑄込まれた文字や記号はまだ見られない。殷代前期にあたる二里岡期の礼器である青銅容器にもまだ鑄込まれた文字が見られなく、ようやく殷代後期の殷虚期になって鑄込まれた文字がみられるが、まだ図象記号か父甲とか祖乙という十干名をとまう父祖の名前だけである。父祖の十干名はこの礼器で祀られる先祖の名前であり、図象記号はいくつかの説があるが(白川静は殷王朝に奉仕する集団の職能をしめすものとし、林巳奈夫は氏族に属する精霊_二者を示すものとする)、この礼器で祀られる氏族に関する記号であると思われる。

時代が殷王朝の最晩期になって青銅礼器の容器に鑄込まれた長い文章の銘文が見られるようになってくる。宰橐角〔泉屋博物館所蔵、殷後期Ⅲ〕には、

庚申の日、王は間の地におられた。王はおでましになり、宰橐角が従った。貝五貫を賜り、父丁の青銅礼器を作った。六月。王の在位二五年、翌祭の日のことである。

と銘文が鑄込まれてある。紀年は日月年が倒叙法でしるされ、作器者の宰が殷王から寶貝(子安貝)を五貫下賜され、それで父丁のためのこの青銅礼器を作ったことが銘せられている。またこの銘文が把手の反対側の内腹側にあり、儀礼を行う人にはみえるが、他人には直接みえない。必要であればみることができるといのが初期の銘文の性格のようである。一応ここに青銅礼器製作の縁起を書きはじめたことは、銘文の性格に大きな変化をもたらすことになった。一つは記録文章としての性格を持ち、同時に王からの恩賞下賜と礼器製作がむすびついたことによる政治的性格をもつことになった。

さらに銘文が西周中期には当時の訴訟とその判決をしるものがみられるようになる。すこし長いが五祀衛鼎の銘文をみてみよう。

正月第一週庚戌の日、(裘)衛は邦君厲とともに井伯・伯邑父・定伯・遯伯・伯俗父に訴え出た。裘衛は云った「厲は『わたしは共王さまの土木仕事を請け負い、昭大室の東北で二本の川を治めた』、また『わたしは汝に田五田を与えよう』と云いました」。そこで(井伯ら)は厲に「あなたは、田を出すのか出さないのか」と訊問した。厲はそのことを認めて「わたしは確かに田五田を出しましょう」と答えた。井伯らは審議し、厲に誓いをたてさせた。

そこで、参有司である司土の邑人逋・司馬の頌人邦・司工の附矩と、内史の僚友である寺芻に命じ、裘衛に

移譲されることになった厲の田四田を檢分させた。またその邑には屋敷もおかれた。田四田の北の境界は厲の田に接し、東の境界は散の田に接し、南の境界は散の田と政父の田に接し、西の境界は厲の田に接している。邦君厲とともに裘衛に田を移譲したのは、厲の叔子夙と厲の役人である申季・慶癸・鹵表・荊人敢・井人倡犀であった。衛の一族の者其が宴を催した。

衛はわが父の宝鼎を作った。衛よ、万年までも、永く宝として用いるように。

王の在位五年のことである。

とある。裘衛と邦君厲との間におこった土地争いを、当時の国の執政官のところにもち込み、その裁定を経て田四田を移譲されることになったが、銘文はこの土地の詳しい位置を隣接する土地で説明をしている。また関係する人々についても詳しく記録し最後に父のための宝鼎づくり、その永く宝として用いるようにいつているが、この銘文の多くは土地移譲に関する経緯とその境界線の記録である。

西周中期になると銘文にもう一つの形式みられる。それは冊命という職務任命とそれにもなう礼服などの下賜儀礼が主なる契機となるものである。この時代は殷代的な礼がおわり周的な礼が確立してきた時でもあった。殷代に礼器の主流となっていた爵などの酒器がなくなりはじめ、銘文では図像記号がつかわれなくなってきた。銘文には冊命儀礼が王が「曰」というとして王のことが直接話法で記録されている。そこには冊命儀礼において王が言葉として読み上げることによって有効性が発せられると考えられることを示していると思われる。銘文には文字として読まれることを前提としていたことは自明のことである。このように銘文は文字として青銅礼器に鑄込まただけでなく、それは声をあげて読みあげるものであった。

西周後期になると、王命を書きとどめるものがみられ、毛公鼎のように四八〇字におよぶ「王若曰」（王はか

くのごとく云われた)ではじまる王命を鑄込んでいるが、また、この期になると作器者のことばが王命に先行している銘文もみられる。このようなものを自述形式といわれ、連盤の銘文には作器者の先祖家系の人々が仕えていた周王の文王から宣王にいたることを物語っている。このような自述形式の銘文は目につきやすいところに鑄込まれていて、祭祀や饗宴に参加した人びとはみることができた。

以上のように青銅礼器の銘文についての考え方が時代の流れの中でどのように変化してきたかをみたが、ここから最近の金文学についての現状をみてみたい(浅原達郎氏の紹介文を参照)。金文学で一番注意をしなければいけないのは新出土の青銅礼器に鑄込まれた銘文の新しい読みによって、今までの銘文に新しい説が生まれてくる。このため新資料について注意深く注目しなければいけない。そのために資料集や目録や索引については、どこまでの新資料が収録されているかを、念頭におきつつ利用することになる。研究論文については、どこまでの新資料と、それをもとにした研究とが、参照されているかが重要になってくる。文化大革命後の一九七〇年代は政治的な要因をあってか、新出の資料が多くあり、かつ重要なものが多くみられる。西周時代の主なものを陝西省内だけみても利簋(臨潼・零口出土)、裘衛諸器(岐山・董家村窖藏出土)、微氏家族諸器(扶風・庄白窖藏出土)などがあり、春秋戦国時代の金文には秦公鐘(陝西省宝鸡太公廟村出土)、曾侯乙編鐘(湖北省随県出土)、中山王墓出土の諸器(河北省平山出土)のような重要な発見が数多くみられる。

これらの新発見を受けて、一九八〇年代には多くの資料集、目録、研究論文が発表された。金文史料を網羅的にあつめ、その青銅器の所蔵状況についていねいに調査がされた『殷周金文集成』(中国社会科学院考古研究所 一九八四—一九〇年)、史料的に価値のたかい金文と、その美しい拓本と妥当な銘文の釈読とが特色である『商周青銅器銘文選』(上海博物館商周青銅器銘文選編写組 一九八六—一九〇年)は有益なものである。目録には

『金文著録簡目』（孫稚雛 一九八一年）がある。古文字学の専門研究雑誌には一九七九年から『古文字研究』が発行されている。しかし、一九八〇年代からしばらくは新出の資料が少なくなったが、このころに白川静の『金文通釈』（一九六四―八四年）は一九七八年以降に発行された「補釈編」がかるうじて新資料を取り入れているが、一九八〇年代の研究は反映されていない。今のところ一九八〇年以降の新研究を通観するものはない。

ところが一九八〇年代から、再び新出の金文史料が数多く発見され、且つそれが従来のように畿内の陝西省でなく、地方の外藩諸侯の墓地から出土するものが見られるようになってきた。その一つは山西省の曲沃―翼城県の天馬―曲村に在った晋侯墓地の発見で、墓地のありかたや、出土品の優れたものは考古学上から見ても大変重要であるが、青銅礼器群の出土と、それに見られる銘文は金文史料としても、西周史上からも大変重要なものである。なかでも八号墓から出土した晋侯蘇鐘の銘文は内容が重要であるばかりか、刻銘であることも注目される。このほか河南省平頂山市で調査された応国の墓地から出土した青銅器や、甘肅省礼県太堡子山の秦国初期の都城と公墓が存在したと考えられている遺跡からは「秦公」の銘文をもつ青銅器が出土したなど、西周諸侯の金文史料の新出は今後おおいに期待される。

二〇〇〇年代にはいるとまた陝西省からいくつかの発見があつたが、とくに眉県楊家村の青銅器窖藏からは注目される銘文がみられる青銅器群が出土しており、こんごも新しい発見がおおいに期待される。また、中国の経済状況の好転による新収集品が見られ、ここにも新しい金文史料が期待される。

金文学は銘文の研究が中心であるが、同時に重要なのはその銘文の鑄込まれた青銅器についての理解がどうしても必要である。青銅器の編年を理解して初めて銘文の時代が確定する第一歩を手に入れることができる。このためには殷周青銅器の考古編年を行った林巳奈夫の『殷周時代青銅器の研究―殷周青銅器綜覧一』（一九八四年）

を理解することが必要である。白川静・林巳奈夫両氏なきあとの金文学は新出の新資料をこれまでの研究の蓄積のうえにいかにか理解していくにかかっている。

追記 この「中国古代史研究の問題点」は、本来、白川静の古代史論(立命館大学白川静記念東洋文学文化研究所編『白川静の世界Ⅲ思想・歴史』に書かれた拙文)を論する前提として行った。最近を中心とした甲骨学・金文学に関する問題点の整理ノートである。

〔参考文献〕(文中に掲載した参考文献・引用文献ははぶく)

白川静『甲骨金文学論叢一—一〇』立命館大学文学部中国文学研究室、一九五五—六二年(一一五は『著作集別巻第三期』所収、六—一〇は続刊)

白川静『白川静著作集一—一二卷』平凡社 一九九一—二〇〇年

白川静『字通』平凡社、一九九六年

董作賓『甲骨学五十年』藝文印書館、一九五五年

王宇信・楊升南主編『甲骨学一百年』社会科学文献出版社、一九九九年

陳夢家『殷墟卜辭綜述』科学出版社、一九五六年

貝塚茂樹編『古代殷帝国』みすず書房、一九五七年

『貝塚茂樹著作集一—一〇』中央公論社、一九七六—七八年

林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究—殷周青銅器綜覧一』吉川弘文館、一九八四年

中国社会科学院考古研究所編『殷周金文集成』中華書局、一九八四—九四年

中国社会科学院考古研究所編『殷墟的発現与研究』科学出版社、一九九四年

- 中国社会科学学院考古研究所編著『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社、二〇〇三年
- 中国社会科学学院考古研究所編著『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社、二〇〇四年
- 貝塚茂樹・伊藤道治『古代中国―原始・殷周・春秋戦国』講談社学術文庫、二〇〇〇年
- 伊藤道治『古代殷王朝の迷』講談社学術文庫、二〇〇二年
- 松井嘉徳『周代国制の研究』汲古書院、二〇〇二年
- 初期王権研究委員会編『古代王権の誕生―東アジア編』角川書店、二〇〇三年